

茶園における整枝時期が一番茶に及ぼす影響の品種間差異

【要約】 秋から春期にかけての整枝時期が一番茶萌芽・摘採期や新芽形質に及ぼす影響は、‘やぶきた’以外の品種でもみられ、品種間差が認められる。その差は品種の上位芽優勢性と関連があり、上位芽優勢の強い‘めいりよく、ふうしゅん’では影響が大きい。

農業技術振興センター・茶業指導所

【実施期間】 平成 29 年度～令和元年度

【部会】 農産

【分野】 戦略的な生産振興

【予算区分】 県単

【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

県内の茶業経営体の著しい規模拡大や秋番茶製造の長期化によって秋整枝が晩秋期まで遅延する事例が増加している。主力品種‘やぶきた’においては、秋または春期に実施する整枝の早晚が一番茶の早晚だけでなく新芽形質などにも影響を及ぼすことが明らかになっており、その他の主要品種においても同様の影響がみられると考えられるものの、影響の強弱については十分に明らかになっていない。

そこで、‘やぶきた’以外の品種において、秋から春期にかけての整枝時期が一番茶に及ぼす影響の違いについて検討する。

【成果の内容・特徴】

- ① 秋から春期にかけての整枝時期が遅いほど、一番茶の萌芽・摘採時期が遅くなる傾向は、いずれの品種でも認められ、中でも‘めいりよく、ふうしゅん’は整枝時期による摘採期の早晚差が 11～12 日と大きい（図 1）。
- ② 秋から春期にかけての整枝時期が遅いほど、一番茶の新芽重が大きく新芽数が少ない「芽重型」の新芽形質になる場合が多く、‘めいりよく、ふうしゅん’はその傾向がより強く認められる（図 2）。
- ③ 着生位置の異なる新芽の整枝後の生育には品種間差がみられ、上位の側芽が極めて強い品種（上位芽優勢強）、上位の側芽が強い品種（上位芽優勢やや強）、上位の側芽がやや強い品種（上位芽優勢中）および下位芽まで一定生育する品種（上位芽優勢弱）に分類できる（表 1）。
- ④ 整枝時期が一番茶の萌芽・摘採期および新芽形質に及ぼす影響が大きい‘めいりよく、ふうしゅん’は、上位芽優勢やや強～強に分類され、整枝時期の影響の大きさと上位芽優勢の強弱には関連がみられる（表 1）。

【成果の活用面・留意点】

- ① 品種特性を考慮した整枝時期決定のための基礎資料として活用できる。
- ② 品種の上位芽優勢性は、整枝後の着生位置別側芽の開葉数を経時的に計数あるいは観察することで容易に調査可能である。整枝時期の影響が未知の品種でも、上位芽優勢性の把握によって整枝時期の影響の大きさが簡易に判断できる。
- ③ 冬期や早春期の低温害を受けた茶園では、整枝時期の影響が従来とは異なる場合がある。

[具体的データ]

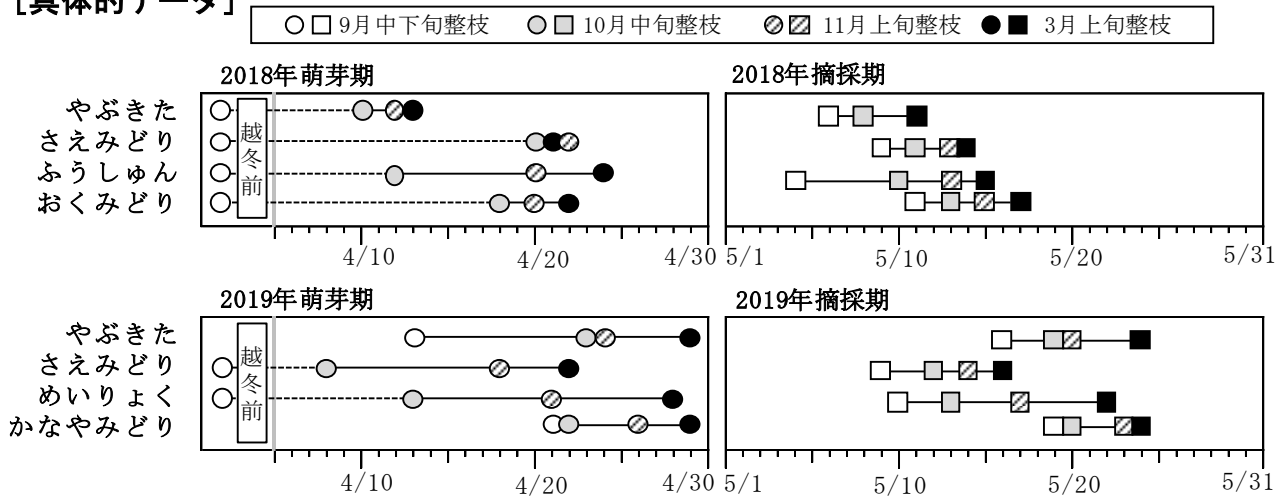


図1 主要品種における整枝時期が萌芽期・摘採期に及ぼす影響

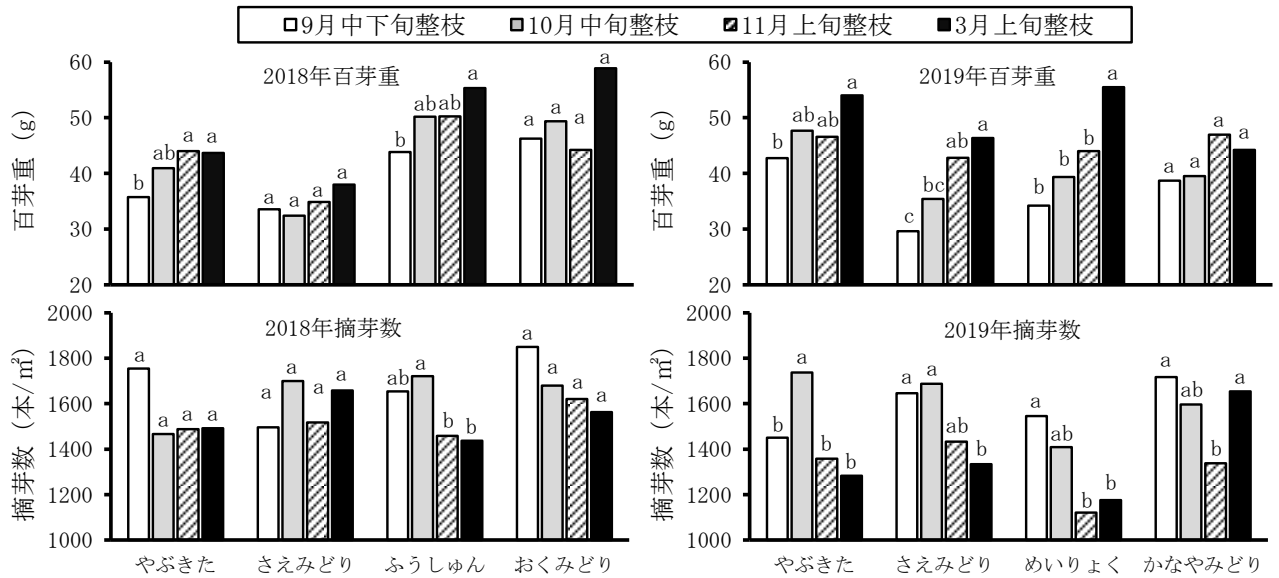


図2 主要品種における整枝時期が一番茶の新芽形質に及ぼす影響

注) 同一品種の異符号間には有意差あり (Tukey HSD 検定 5%)

表1 上位芽優勢の強弱による主要品種の分類

上位芽優勢	特徴	該当品種
強	上位の側芽が極めて強い	めいりよく、(つゆひかり)
やや強	上位の側芽が強い	ふうしゅん、さえみどり
中	上位の側芽がやや強い	やぶきた、(はるみどり)、(おくゆたか)
弱	下位の側芽も一定の生育	かなやみどり、おくみどり、(さやまかおり)

注) 整枝後、着生位置が異なる新芽の開葉数推移調査 (2018年) による分類 () は参考品種

[その他]

・研究課題名

大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名：野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興

小課題名：安定生産が図れる茶園の樹高管理技術の開発

・研究担当者名：忠谷浩司 (H29～R1)、松本敏幸 (H30)

・その他特記事項：

令和元年 11 月の日本茶業学会研究発表会および令和 2 年 2 月の茶研究会で発表。